

令和6年度 第2回岡山県立図書館協議会

日 時：令和7年2月20日（木）14：00～16：10

場 所：岡山県立図書館 サークル活動室

出席者 ○委 員：秋山委員、工藤委員、近藤委員、関委員、平井委員、
本藤委員、森田委員、山口委員、湯澤委員

○県立図書館：大西館長、笠原副館長、藤原総括参事（総務・メディア課長）、
松本総括参事（図書館振興課長）、隈元資料情報課長、
神田サービス第一課長、鳥越サービス第二課長、
服部総括副参事（企画・メディア班長）

欠席者 ○高野委員

1 開会

2 開会挨拶 県立図書館 大西館長 挨拶

3 資料確認

4 協議・報告

（1）令和6年度事業概要

資料1

資料に基づき、事務局から説明

【委員】

休館日を4日増やしたことについて素晴らしい取り組みだと思う。市町村図書館では休館日や蔵書点検の日を減らしてその分開館するということが行われてきた。職員の体制が変わってきたり、予算も減ったり、職員の十分な配置がない中で、開館日は増やしていき、十分なサービスができる準備ができていないのに開館することが続いていた。今回、県立図書館が理由をはっきりした上で閉館日を増やして設定したことは良いことだと思う。市町村図書館もそれを参考に職場の改善ができるのではないかとはいやすくなった。

【委員】

図書館の場合、夜間開館や休日開館などサービス時間の延長により、職員間の交流が減ることが以前から気になっていた。1か月に一度も顔を合わせていない職員がいるということは職場としてどうかと思うので、職員ミーティングの機会を増やし、サービス向上のため休館日を増やしたことはよいことだと思う。

【委員】

コロナで来館者が減少しているというのがあったが、戻ってこないというより、子どもが変化してしまっている。コロナによって抜け落ちた数年間というのは子どもにとって非常に大きなマイナスとなった。いろいろな意味で子どもたちが違うなとか、成長していないと感じる。コロナによって以前のように戻らないという状況がしば

らく続くと思う。そうした中で、おはなし会や子ども向けのコンサートなどのイベントに多くの参加者があり非常に頼もしく思う。ティーンズコーナーへの高校生の展示なども粘り強く続けてほしい。

一方で、学校図書館の司書は市町村によって差はあるが、会計年度任用職員が増えている。県立高校の図書館でも20数名が正規職員で、それ以外は会計年度任用職員でやっている状況であり、より一層、県立図書館の役割が大きくなっていると思うのでよろしくお願いしたい。

【委員】

昨年2月の協議会をきっかけに、ノートルダム清心女子大学と協力して、学生から図書館の利用者を増やす取り組みについて提案があったとのことだが、その結果を踏まえて来年度どう取り組むのか。

【事務局】

ノートルダム清心女子大学の協力をいただき、半年と短い期間ではあったが、担当の先生と手探りの状態で、学生と当館の若手職員で取り組んできた。普段図書館を利用していない方へのアンケートがなかなかできなかったのも、そのあたりを学生の力を借りてできたらよいと考え、そのデータから県立図書館の運営を考えていきたいとのアプローチを試みたところであるが、声を拾うことがアンケートの設定も含めて難しいと感じた。今回やってみて一番大きかった点は、参加した学生から、「図書館にはいろいろな機能があり、いろいろ工夫して様々なことをやっていることが分かった。」「この活動に参加して非常によかった。来年も引き続きやりたい。」との感想をいただいた。今回のように、いろいろな形で学生に図書館の運営に参加してもらうことは大切なことだと思った。

また、若い世代の情報の取り方が違うと感じた。スマホを使って情報収集をしているので、そうした世代へのSNSを活用したアプローチを充実させてまいりたい。

さらには、当館の蔵書などの強みを掘り下げていく取組なども考えている。

【委員】

学生が図書館は本を借りるだけの機能ではないとアピールするとよいと言っていた。確かに大学の図書館は専門の本が並んでいて、本の貸出がメインである。県立図書館では、市民が集ったり、郷土の資料が探せたり、親子など様々な層の市民が参加する企画が動いているというのは、来てみないとわからない。学生にとっても来館して自らが調べるといった経験ができてよかったと思う。

【委員】

来館者数と個人貸出冊数が都道府県立図書館の中で全国一位をずっと続けてきたというのは大事なことである。また、県立として、レファレンス件数も大阪に続いて2位であり、年間7万件もある。利用者が本を借りるだけでなく、調べもの、調査に利用しているということをもっと強調して良いと思う。

【事務局】

レファレンスはまさに県立としての本業であると思う。市町村の図書館や県民から

頼りにされることはありがたいことである。レファレンスの認知度も含めもっと PR に努めてまいりたい。

【委員】

お話のレファレンスを利用する側からすると、県立図書館のレファレンスは質が高いと感じる。件数よりも質の高さを PR すべきだと思う。回答の期間も早いし、関連図書も多く教えてもらえる。

この質の高さを担保する上で、新しい司書への養成課程にもかかわることで、市町村図書館でも質の高いレファレンスが提供できるのではないかと思う。利用者としては、県内どこの図書館へ行っても、県立図書館と同等のレファレンスサービスを受けられると理想的だと思う。

【委員】

学校では課題解決学習に取り組んでいるが、生徒はネットで調べるのみで、なかなか参考文献を読み込むところまではいかない。高校生がレファレンスをどの程度利用しているのか。潜在的なニーズはかなりあると思う。

【事務局】

具体的な件数まではわからないが、生徒がグループで来て調べものをしていた際にはグループ研究室を案内することはある。またビジネスプラングランプリの講座を毎年開催しており、参加した高校生にレファレンスを行っているところである。

【委員】

図書館に来館し、一度レファレンスを経験すれば、その後も利用するのではないか。

【事務局】

探究学習でもっと図書館が使われるのではないかと考えていたが、一人一台端末が導入され、なかなか図書館の利用につながっていないと感じている。学校図書館を含め学生の中に図書館を使うことを経験してもらいたいと考えている。

【委員】

県立高校の学校図書館の司書が生徒に県立図書館を勧めるなど、県立図書館との連携がもっとあってよいと思う。

【事務局】

当館の司書と県立高校の司書は人事交流があり、県立図書館の経験者も多くいる。このため、もっと連携をとってまいりたい。

【委員】

教員が図書館につないだり、レファレンスを利用したりすることをお願いすればよいのだが、教員自身がレファレンスを経験することも必要だと思う。

(2) 令和7年度当初予算案の概要

資料2

資料に基づき、事務局から説明

【委員】

維持運営費について、人件費はこれから毎年増えていくと思うが、数多く実施して

いる様々な事業（イベントや展示会）の数というのは何か基準があるのか。

【事務局】

明確な基準はない。これまで、できるサービスは精一杯やっていこうという流れがあったが、今年度からその見直しを進めているところである。

今後は、単に図書館を場としたイベントを行うのではなく、本に誘導できるようなイベントに精選していく必要があると考えている。

【委員】

定員数に対して参加人数がかなり少ないものもある。だから効果がないというわけではないが、明確な基準を作って事業を実施してはどうか。

【事務局】

まさにそこに課題意識を感じており、今回の資料から定員充足率の項目を設けたところである。定員 120 名に対して数十人しか入らないイベントについて、手をかけて実施する必要があるのか。また、職員研修についてもオンラインや配信などもあり、来館して研修を受ける人数は減ってきている。研修に来館しにくいといった市町村の状況もあるのだろうと思う。こうした研修も含めてあり方を見直す時期に来ていると考えている。

【委員】

太陽光の設備について、修理費等がかかるが、設置してからの収支や費用対効果はどうか。

【事務局】

太陽光発電設備は開館当初からあり、その有効活用を図るため、今回修理を行うものであるが、発電でまかなえる量を試算したところ、年間 200 万円程度であったので、10 年で元が取れる状況である。開館から 20 年使っており、開館当時どのくらいの金額がかかっているかまではわからないが、それなりの効果はあったのではないかと考えている。また脱炭素にも資するものと考えている。

【委員】

相互貸借による搬送について、市町村図書館へ週に 1 から 2 便行っているが、業務量も搬送費かなりかかっていると思う。市町村としては非常にありがたいので、ぜひ続けてほしい。レファレンスについても利用者から相談をうけたら、自館の資料と県内図書館の資料、県立図書館が公開しているレファレンスデータベースや郷土情報ネットワークを参考にさせてもらっており、非常にありがたい。

【委員】

インターネットによるレファレンスも件数にカウントしているのか。

【事務局】

ホームページからレファレンスを依頼することも可能であり、その件数もカウントしている。レファレンスデータベースには当館が対応したレファレンスの中から皆様にも共有したい事例をホームページで公開しており、年間 180 件を新たに登録している。

(3) 岡山県内市町村立図書館の動向について

資料3

資料に基づき、事務説明

【委員】

真庭市立図書館のホームページは、若者が好むデザインで、市として読書に力を入れていると感じるがどうか。

【事務局】

市の方針により、市民にとって図書館が知恵と情報があつまる拠点として、まなび、地域の未来を描ける居場所や活動場所と考え重視しているのだと思う。市内の各地区館では市民との会が開催されている。

【委員】

倉敷市立中央図書館が複合施設となる計画が進んでおり注目しているところである。十分な書庫スペースの確保や駐車場、各施設への導線などが気になるところである。複合化で人が集まる施設となり、図書館に出会う機会が増えることにより、若者の図書館利用が増えるのか注視している。

【事務局】

人口減少や財政的に厳しい中で、施設を集約せざるを得ない状況がある。ただ、複合化した施設をみると縦割りだと感じることもある。施設全体として開館時間などの運営を考えるべきだが、各施設間の連携に課題があると感じている。

【委員】

奈義町も美術館と図書館の複合施設であるが、美術館の来館者が図書館へ行くとはなかなか考えられない。一つの施設で、別々にやっているイメージだ。20年、30年先に県立図書館が複合化することがあるとすれば、お手本となるようになってほしい。

【事務局】

県立図書館も以前は複合施設であったが、それでは本来の図書館機能が十分に果たせないと考え、単独施設になった経緯がある。現在の流れは、複合化せざるを得ない状況ではあるが、それならば、施設全体の視点での運営を目指すべきだと考える。

(4) 岡山県職員及びWeb アンケートの結果（概要）について

資料4

資料に基づき、事務局説明

【委員】

レファレンスについて県職員があまりを利用していない一方で、一般の利用者は結構利用していると思った。その点は、県立図書館に対する県民の期待の表れであり、県立ならではのことだと思うので、もっとアピールするポイントであると思う。

また、自習室について、中学生や高校生はともかく、大人の要望がある点に驚いた。

【事務局】

閲覧席での自習が増えたと感じている。これまでは、閲覧席での自習禁止について張り紙による告知のほか、館内放送や声掛けをしていたが、現在は、館内放送と声掛

けをやめている。自習可能とアナウンスすると、自習の利用者で閲覧席が埋まる恐れがあり、どちらに舵をきるか悩ましいところである。ただ、自習をしたいとのニーズは確かにあるため、今後どのようにするか検討していきたい。

【委員】

電子書籍について、全国の都道府県立図書館の導入状況や県立図書館としての動きがあれば教えてほしい。

【事務局】

都道府県のうち29件程度導入されていると聞いている。金額が高額である点は大きな課題である。県立図書館として全県域の方への資料提供を考えたときに、図書館に来たくても来られない方、遠方のため来られないという方への資料提供をどうしていくのかを考えると、本当に必要とされるものを提供していかなければならないと思っている。ただ、読み物のようなものを県立図書館としてそろえていくのかという点には疑義があるので、すごく利用があるというわけではないかもしれないが、他県でも参考図書などを中心としたものになっている。冊数としては予算に応じて各県ばらつきが大きい。

最近の動きとしては、長野県が、市町村と共同で電子書籍を入れているモデルがある。これは、費用負担などの問題で他の都道府県に広がってはいなかったが、新潟県が、すでに導入済みの新潟市を除いて、その他の市町村と導入の検討をしていると聞いている。

岡山県でも近隣の市町村で連携して電子書籍を導入する動きもあるが、その枠組みからも外れる小規模の市町村をカバーする電子書籍の導入も県立図書館の役割であると考えている。まずは、県立図書館として、本当に必要な部分の電子書籍を整備し、次に、市町村を支援するためのものをそろえていくという形で進めていけたらとの考え方である。

【委員】

本の紙質を感じられることが大切な部分であると思う。電子に切り替える部分と紙の本の良さを残す部分とを十分に研究しながら検討を進めてほしい。

【事務局】

電子書籍がすぐに紙の本にとってかわるものだとは思っていないし、紙の本の良さという部分は大事にしつつ、電子でなければいけない部分をしっかり見極めて検討してまいりたい。

【委員】

紙の本の良さというのも十分にわかるが、若い世代は電子書籍をスマホで読むことが増えている。若い層の利用者を増やすためには前向きに電子書籍を検討したほうがよいと思う。

【委員】

電子書籍は資料そのものではなく、アクセス権を買うというわけで、期限が来れば更新が必要になる。紙の資料は蔵書として館に残るが、電子はサービスの終了とともに

にデータが残らない。県立図書館として必要な資料は収集しなければならない。コロナの交付金により、全国の自治体に電子書籍が広がったが、交付金の終了とともに、自館の資料費だけではまかなうことができず、やめた自治体もあると思う。そのあたりの動向も含めて、県立図書館が導入する以上は継続的にサービスを続けなければならない。既存の資料費に加えて、電子書籍の予算を確保することが継続するうえで重要であるので、ぜひ検討をお願いしたい。

【事務局】

岡山の場合は、将来的な予算の保障がされていない中で、コロナの交付金を使っでの導入に躊躇したところがあった。しかしながら、今後の流れとして、電子書籍を全く導入しないという選択肢はないと思っている。その中で、資料保存センターとしての県立の役割を踏まえて、すべてを電子に乗り換えることはないが、紙の本とのバランスをとりながら検討してまいりたい。

(5) これからの県立図書館運営の方向性について

資料5

【委員】

柱をわかりやすい言葉で表現しているのは、非常に大事なことだと思う。また、4つ目の子ども読書は第4次のサービス計画の中では4番目がデジタルネットワークに対応する図書館であったが、デジタルネットワークはそれぞれの柱に分散し、子どもの読書を一つの柱として立てたということだと思う。これまでも子ども読書に関する取り組みをしてきており、これ自体はよいと思うが、子どもの場合は、県立よりはむしろ市町村が最前線に立つということになる。市町村と県の役割を意識しながらやってほしいと思う。

もう一つは、レファレンスサービスは県立図書館にとって非常に重要な役割であると思う。第1の柱に掲げてもよいぐらい重要視したほうがよい。その中で、先ほどのアンケート結果で県職員の仕事に対する支援で鳥取県立図書館などは、図書館が大事だという意識を広めていっている。そのほか庁内サービスとして図書館の利用者には市民、県民のほかに議員や県の職員もいる。この人たちも地域情報などいろいろな情報を求めていると思う。議員にレファレンスを使ってもらえるとよいと思う。この点を県立図書館として重点に挙げてよいと思う。県の仕事、議員の仕事をバックアップする機能があってもよいと思う。議会図書室を県立図書館の分室として行政資料や地域資料を提供していくような将来展望を考えてみてよいと思う。

【委員】

レファレンスについては、強い柱としてもってほしいと思う。また、子どもへの読み聞かせや赤ちゃんへのわらべ歌などを県立図書館でやっているという点は、市町村のひな型としてもぜひ残してほしい。読み聞かせのボランティアを養成して、市町村での担い手を育てていくことが必要だと思う。

今の子どもたちは刺激的な動画などデジタルに囲まれて生活している中で、0歳、1歳児への話しかけを行いながらの応答的な読み聞かせというものが、心や言葉を育

てる上で非常に大切である。大人たちのコミュニケーションが LINE などにより、大人同士の会話や声を子どもが聞く体験が減ってきていると感じる。小さいときに親が読み聞かせをしてくれた体験や景色は、40代、50代になり、心が折れそうになった時に支えてくれると思う。今の親は子どもたちにこうした体験をもたせてあげられているのかというのが疑問に感じる。県立図書館が当たり前のようにこうした読み聞かせを実施しているのがとても心強く思う。

電子書籍と紙の本との問題も、紙の本は体験や思い出になるし、持ち運びができ、においもあるし、めくこともできる五感体験である。小さい子どもには紙の本というのはぶれずに、大きくなった時に、デジタル社会の使い手となる心ある人間となるよう県立図書館で育ててほしい。物語などにふれないと、ゲームで敵をやっつけてばかりのストーリーしか見ていない子どもたちが多い。子どもたちへ読み聞かせなど、あまり成果につながらないように見える取り組みも着実に行ってほしい。

【委員】

これからの方向性の資料について、皆さんの思いがあふれすぎていて少し読みにくいところがあると感じた。2040年の姿についての記述の主語が県民の場合と図書館の場合があり、恩恵を受けるのが自分たちなのかどうかわかりにくい。できたら、県民がこんな風にいいことがあるということがわかりやすくなると良いと思う。取り組みのアイデアの部分も実現するときっと楽しいと思うことが書かれているのもっと目立つようにしてはどうか。わくわく感を強調して、いろいろな人に見ていただけたらと思う。

また、子どもたちの教科書もこれからデジタルになってくことから、紙の本に触れる機会が減ってくると思う。バックヤードツアーや本の修理体験など生の本に関わるイベントは人気があると感じるため、こうしたイベントをもっと多くの人に体験してほしいと思う。バックヤードツアーでの物として本がたくさん並んでいる書庫を見ることは、デジタルの画面ではわからない体験であると思う。